

I 急病のときの対応

1. 熱が出たとき

家庭での処置(応急処置も含めてまず家庭でやること)

1. 薄着にさせる。
2. 体を冷やす(後頭部、首のまわり、脇の下など)。ただし、寒気がある場合は体を温める。
3. 部屋を涼しくする。
4. 原則的に子供が欲しがらる飲み物を少量ずつ与える。少し冷たくしてやる方を好む。
5. 解熱剤などの使用は最小限にとどめる。
機嫌が悪くなければ、または生後6ヶ月未満の乳児は原則として使わない。使うときは医師の指示どおりに投与する。
抗けいれん剤の座剤と併用する時は30分以上の間隔をあける。

その後の対応



レベル1 家庭で経過をみる、又は翌日に病院受診

機嫌もさほど悪くなく水分をとれている。



レベル2 その時点で病院受診

生後3ヶ月未満の乳児。機嫌がとても悪い(泣き止まないあるいはぐったりしている)。寒気が1時間以上続く。青ざめた顔色が続く。水分がとれないまたは頻回に吐く。



レベル3 緊急に病院受診、救急車要請

意識がはっきりしない(反応がにぶい)。けいれんがある。

家庭で看る時のポイント

熱が上がりきる前は、手足が冷たく、寒気があり、震えたり、汗もあまりかきません。つらい時期ですが1時間以内には終わります。寒いので布団を掛けて暖かくしてあげます。

熱が上がりきった状態、または下がって来るときは、手足が温かくなり元気も出てきます。40℃の熱でも遊んだりする子もいます。暑がりですので、夏場の暑い時期はできればエアコン等で室温を快適な温度まで下げます。

アイスノン、氷と水を入れた袋等で頸部、後頭部を冷やします。“熱さまシート”などの使用は、ずれて鼻口をふさいでしまうこともありますので、目の前に居るときだけにしましょう。寒気のあるとき、嫌がるときは冷やさないようにします。

解熱剤(げねつざい:座薬、飲み薬があります。)使用の目的は、一時的に楽にして眠れるようにしたり、水分がとれるようにしたりすることで、熱が高いから使用するという物ではありません。高熱の時は効果が2～3時間だったり、せいぜい1～2くらいしか下がりません。出来れば病院から出された物を使用し、市販の物を使用するときは成分がアセトアミノフェンかイブプロフェン

ンと書いている物以外は使用しないようにしましょう。

